HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	町衆と文芸 : 近世初期における堂上と地下との関係をめぐって［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	工藤, 隆彰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12955号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70208
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takaaki_Kudo_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　工　藤　隆　彰

学位論文題名
町衆と文芸
―近世初期における堂上と地下との関係をめぐって―

・本論文の観点と方法

和歌史の研究において最も立ち遅れているのは近世期の和歌史と言ってよい。近年、近世和歌に関する研究は著しく進展してきたものの、残された課題は多い。とは言え、近世和歌の研究は中古からの展開を受け、更に近現代和歌史に接合させることにより、和歌通史全体の構築を充実させる点において極めて重要な意味を持つ。

そこで本論文は近世初期に着目する。従来、近世初期の和歌史・歌壇史の展開を論じる際、「堂上と地下」という構図が重要な視座として設定されてきた。しかしながら近世初期における堂上と地下の双方の和歌をめぐる交流とその影響関係の実態は未だ十分に解明されているとは言えない状況にある。申請者はこの状況に対し、連歌および茶の湯等の文芸にまで視野を広げることにより、それらの文芸活動が和歌活動の場と重なることを確認する。そしてその活動の担い手となった町衆が堂上との関係を強固にし、和歌・古典学をも含めた交流へと展開していく実態を明らかにし、更にその影響関係を解明するものである。

・本論文の内容

本論文は、第一章「「牡丹花的伝弟子」伊予屋宗珀」、第二章「千利休の文事」、第三章「灰屋紹由・紹益試論」、第四章「本阿弥一族と灰屋紹益」、第五章「灰屋紹益と古今伝授」、第六章「寛永文化期の鷹峯」の六章仕立てで構成されている。

緒言では、近世和歌史研究の視点として「堂上と地下」という構図を指摘しつつも、それは堂上方が極めて優位な情勢として捉えられてきたとする。しかし中世後期に台頭した富裕な商工業者である町衆の流入により、地下歌人達が大幅に増大した。そのような歌人達の個々の活動が未だ十分には解明されていないことが堂上方優位と捉える原因と捉えた。そこで、注目すべき活動を展開していた町衆達を見出し、改めて「堂上と地下」との関係を捉えなおすという問題設定を明示した。

第一章では、これまで連歌作者の伊予屋宗珀と茶人の津田宗伯とが同一人物であるとの説が比較的支持されてきたが、そのような認識を齎した原因を追究し、『明翰抄』、『頴伝明名録』、『茶事談』等の記述を再検討し、その根拠に疑義を呈する。続いて三条西実隆の残した『実隆公記』、『高野参詣日記』等の資料を検討し、宗珀との関係を明らかにする。また、宗珀の命日については誤伝も広まっていたのだが、正しい命日を確認し、誤伝の原因を明らかにする。更に宗珀の用いた「伊予屋」の号について、これまで着目されてこなかった資料をもとに新たに確認し、津田宗伯とは別人であると補強した。続いて伊予屋宗珀・津田宗伯同一人物説を取り上げ、根拠となった資料を再検討した上で否定していく。その上で宗珀は貞徳を一つの源流とする近世初期の地下文壇において、肖柏から古今伝授を受けた門弟として当時から広く認知されていたことを述べた。

第二章では、千利休の文事に関し『不白筆記』に連歌の師として里村紹巴、『南方録』に和歌の師として日野輝資の名が挙げられ、従来の研究では連歌・和歌に関わりあるものとして考えられてきたが、これまで利休作として認識されてきた連歌作品を示し、それを含む利休書状の資料を再解釈することでその根拠に疑問を呈した。更に利休を「連歌師」とする資料

を取り上げ紹巴との関係も視野に入れながら分析を進め、その過程で浮かび上がってきた辻玄哉・津田宗及と紹巴との関わりにも論及し、当時の連歌師の状況と利休の活動との比較検討を進め、改めて紹巴と利休との連歌における師弟関係を論じた。続いて『南方録』の「覚書」、「滅後」の利休と和歌とに関する記事を取り上げその関係について分析を行った。

第三章では、灰屋紹益の成した『にぎはひ草』に示される近世初期における堂上と地下との関係がどのような環境の下で発生・展開していたのかを追求するため、灰屋紹由および紹益父子の連歌・和歌等を中心とした活動について論じる。父紹由に関しては師である紹巴との関係を、連歌を中心にして丹念に追及していく。また、特に従来の近世和歌史において看過されてきた紹益については、その師である烏丸光広、松永貞徳との関係、更に二人の没後に中心的に師事した飛鳥井雅章との関係を取り上げる。そこで、飛鳥井家との交流に蹴鞠の技芸にまで論を展開する。続いて後水尾院を頂点とする堂上歌壇の主要人物である智忠親王、道晃法親王達との交流についても論じた。また後水尾院から受けた紹益への厚遇は和歌の添削にとどまらず、茶の湯の掛物として宸翰を下されたことや、和歌と茶の湯が同じ場で営まれ、堂上と地下が交流していたことを考察した。

第四章では、本阿弥一族と灰屋紹益との関係を京の遊女吉野太夫を絡めて考察する。近松茂矩著『昔咄』には、紹益が京の六条三筋町の遊女吉野太夫を身請けしたため、一門の怒りを買い「父」からも勘当されたが、吉野の一計により許されたという逸話が載せられている。この逸話は井原西鶴『好色一代男』の一典拠ともなっており、『色道大鏡』等にも取り上げられて有名である。先行研究では紹益と対立した「父」や「一門」には基本的に紹由ら灰屋一族であると考えられている。しかし吉野の身請けを認めず勘当した父は養父紹由ではなく、実父本阿弥光益ではなかったかと仮説を立て論証していく。そのため、最初に光益と紹益について、また各々の交友関係を基に考察を進める。光益については『本阿弥行状記』等の資料を中心として分析し、『昔咄』にあった「父」の描写が光益の素性と符合することを述べ、尾張藩主との関係等にまで及ぶ。それら分析を通して紹益を勘当した父が誰であるかを究明する。

第五章では、灰屋紹益の古今伝授に関わる活動を示す資料の考証を行う。ここでは『にぎはひ草』と『古今和歌集相伝之弁』における古今伝授に関する記述を取り上げて検討していく。最初に『にぎはひ草』を中心に分析を進め、『宗祇終焉記』の記事を突き合わせ「きうじん」なる人物の素性、および伝授の箱の伝来についての信憑性を追求する。続いて烏丸光広と光悦との関係、伝授の箱が光悦没後に跡を継いだ光瑳・妙山夫妻の家で管理されていたこと等を論じる。更に、紹益から徳川光友への古今伝授の経緯を『古今和歌集相伝之弁』の記述を元に検討していく。紹益実父光益が光友の父である義直に仕えていたこと、茶の湯を介して尾張藩士達と交流があったことを指摘し、その関係から紹益と尾張との関係を捉え、古今伝授を巡る活動を分析し、記事中の信憑性を判断していく。

第六章では、洛北に位置する鷹峯はこれまでの研究では所謂「光悦村」周辺を題材とする一部を取り上げるに過ぎなかったことを指摘し、光悦以外の本阿弥一族と、従来等閑視されてきた野間玄琢・三竹父子も含めて改めて寛永文化期の鷹峯の位置づけを検討する。本阿弥一族については、「鷹峯記」、「太虚庵記」、『にぎはひ草』等の記述を元に林羅山、深草元政、飛鳥井雅章、松永貞徳・尺五父子等との交流を論じる。続いて野間玄琢・三竹父子の許に訪れた貞徳、尺五、石川丈山、木下長嘯子等との交流にも及ぶ。更に京都所司代板倉家の「一種の文化人サロン」を形成した人々による文芸活動の一拠点として、鷹峯の文化史的意義を考察する。

結語では、本論文の内容を要約し、「堂上」と「地下」との関係の総体を把握し、和歌史の実態を解き明かすための展望を述べる。